

〈資料〉

石丸梧平主宰の家庭雑誌「団欒」に関する調査⑥

宮崎 尚子

はじめに

「団欒」は大正四年六月一日に創刊された雑誌である。大阪の団欒社から発刊されており、紅野敏郎によると創刊号は五千部印刷され、その後再版されたという。所蔵は全国的にも少なく、日本近代文学館が二巻二号、四巻十号を保管しているのみであった。その雑誌を平成二十四年に著者が十八冊発見し、うち一冊（大正六年の三月号）を持つ他は全て尚綱大学図書館に所蔵されている。これまでに「石丸梧平主宰の家庭雑誌『団欒』に関する調査①～⑤」において調査した結果、当時の著名人たちの掲載が多く認められた。小説家だけではなく歌人や俳人、画家の作品が認められる。また大正六年では当時無名の中学生であった川端康成の文章も掲載されている。雑誌の支援団体「日本淑女会」は「団欒社」内に設けられており、会長は大久保大阪府知事夫人であり、副会長が谷本富博士夫人であることから家庭的な一家団欒を標榜した性格の雑誌であったことが推測される。家庭団欒から社会貢献へと石丸の理想は見据えられていた。石丸の読者でもあり妻となつた喜世子と共に精力的な執筆活動を展開した。

「団欒」の主宰は石丸梧平で当時は小説家としてだけではなく評論家、宗教家として著名であった。石丸は明治十九年四月五日に大阪府豊能郡熊野田村に生れた。近隣の大阪府第四中学校（後の茨木中学校、現茨木高等学校）に入学するも、二年級の明治三十三年十一月二十四日に同中学校を眼病により退学している。その時の同窓が満井成吉である。満井成吉は当時茨木中学校の国語教師であり、寄宿舎の舎監をしていた。川端康成等中学一八回生達が卒業する直前に、五年間受け持っていた倉崎仁一郎が急死した。八十八名いた五年級は全員

で倉崎の棺を運ぶことを決めた。この時の様子を書いた追悼文とも言うべき川端の文章を満井は石丸に送っている。生徒葬とも言うべき感動的な生徒達の行動が、雑誌「団欒」の理想とも一致するという理由で巻頭に掲載した。これが川端の初の雑誌掲載の「生徒の肩に柩をのせて」（「団欒」大正六年）である。石丸は明治四十一年に早稲田大学国史学科を卒業後、大阪府立今宮中学校の教諭となる。その後は執筆活動に勤しみ、大正十三年に雑誌「人生創造」を創刊する。後に花園大学客員教授などを務め、昭和四十四年四月八日に八十三歳で没している。

「大阪で生まれた『唯一無二の家庭と文芸』の雑誌」（紅野敏郎）と言われる雑誌「団欒」は家庭的なつながりを尊重しながらも文芸的な物にも理解を示している。石丸梧平と喜世子、木谷蓬吟と千種のように夫婦で執筆しているケースも見受けられる。今回は多くの執筆者の中でも『青輅』の作家でもあった加藤みどり（夫は加藤朝鳥）に焦点を当てて紹介していく。

一、加藤みどり

加藤みどりは（一八八八年八月三十一日）長野県上伊奈郡赤穂村に医師高仲泰一、久与の長女として生まれる。本名はきくよ。幼い頃より『明星』を読んでおり、東京の学校に通う姉妹の世話をする為に上京し、作家を志して徳田秋声に師事する。いくつかの作品が掲載され女流作家として認識されるようになる。加藤朝鳥と結婚する。加藤朝鳥（一八八六年～一九三八年）は翻訳家でもあり文芸評論家でもあった。後に「爪哇日報」の主筆をつとめた。レイモント「農民」やコナンドイル「シャーロックホームズ」の翻訳もしている。みどりと知り合った頃の朝鳥は早稲田大学英文科で文学者を志していたが、生活の為に新聞記者になった。大阪に転居した事によりみどりの活動も大阪に移る事になる。文学者を目指しながらも詩や小説などでは評価されない夫朝鳥と違い、みどりは「青輅」の作家として知られて行くようになる。生涯を通して執筆数が多いのは「青輅」時代と言われる五年間である。岩田ななつ氏の詳細な年譜には書かれた作品とその掲載誌がまとめられているが、「団欒」に執筆した長編小説「漂浪の児」は認められない。大正五年に集中しているがその後は夫朝鳥が評論を掲載する程度であった。当初は夫婦揃っての執筆であったが別居していたことも影響してか別々の活動になっている。

加藤みどりに関しての資料は少なく、管見の限りまとめたものは岩田ななつ『青輅の女 加藤みどり』（青弓社 平成五年）だけであ

二、加藤みどり「団欒」掲載作品一覧

巻数		大正		朝鳥		みどり	
第12号	5	5	5	花より雨に	漂浪の児（長編小説）	八・九・十	
第2巻第1号	5	6	1	花より雨に（評論）	漂浪の児（長編小説）	十一、十二、十三	
第2巻第2号	5	7	1	文芸評論花より雨に	漂浪の児（長編小説）	十四、十五、十六	
第2巻第4号9月号	5	9	1	文芸雑俎（背水陣的の生活）	漂浪の児（長編小説）	十九、二十一（「つゞく」の表記）	
第3巻第1号	6	1	1	きのうの薔薇（長編小説）	無し		
第3巻第3号	6	3	1	きのうの薔薇（長編小説）	無し		
第4年新年号	7	1	1	故由上葉春氏の追懷	無し		
第4年2月号	7	2	1	無し	無し		

る。「漂浪の児」は「団欒」書き下ろしの作品であった可能性が高い。「漂浪の児」は「団欒」に掲載された長編小説であるが、「団欒」が十八冊しか確認されていないために全貌は不明である。ただし大正五年五月には「梗概」が「前号までの荒筋」と載っていることからそれ以前からの連載物であったことがわかる。大正六年の一月には無いのでそれ以前に終了したと思われる。幼い頃誘拐された主人公が織りなす物語であることは確認できた。「団欒」自体が平成二四年までは発見されていなかったため、この「漂浪の児」は加藤みどりの世に知られていない作品である可能性が極めて高い。

以上のことから今回紹介するデータは、「新しい女」を体现した「加藤みどり」の明らかになっていない活動内容を知ることが出来る貴重な資料であるということが言える。このように「団欒」は「青鞥」作家も含めた新しい時代の新しい家庭を標榜していた雑誌だと言うことが改めて分った。

三、加藤みどり略年譜

西暦	和暦	年齢	出来事
一八八八	明治二十一年	一歳	八月三十一日、信州上伊那郡赤穂村に生れる。父高仲泰一、母久与。本名きくよ。 母久与病死。享年三三歳。 弟妹達の進学の為に上京。一軒家を借りて「高仲商店」を始める。徳田秋声に師事する。
一八九九	明治三二年	十二歳	
一九〇六	明治三九年	十九歳	
一九〇七	明治四〇年	二十歳	
一九〇九	明治四二年	二二歳	
一九一〇	明治四三年	二三歳	
一九一一	明治四四年	二四歳	
			朝鳥が大阪新報記者となり、大阪に転居する。岩野泡鳴・清子と親交を結ぶ。『青鞥』に参加する。『女子文壇』に「東京の女と大阪の女」を書く。『青鞥』に「高窓の下」を初掲載する。
			長男水城が誕生。
			加藤朝鳥（本名信正）と結婚。

第4年3月号	7	3	1	無し	無し
第4年4月号《再版》	7	4	1	無し	無し
第4年記念特別号6月号	7	6	1	無し	無し
第4年7月号	7	7	1	無し	無し
第4年10月号	7	10	1	象徴主義の解（文芸講話）	無し
第5年正月号	8	1	1	文学を呪ふ心と溺れる心と	無し
第5年2月号	8	2	1	無し	無し
第5年3月号	8	3	1	無し	無し
第5年4月号	8	4	1	無し	無し
第5年第5周年記念号	8	6	1	無し	無し

一九二二年	大正十一年	三五歳	三月二二日永眠。
一九二一年	大正十年	三四歳	朝鳥がジャワから帰国する。みどりは浅草区小島町楽山堂病院に入院する。
一九二〇年	大正九年	三三歳	朝鳥が爪哇日報主筆として爪哇に赴く。みどりは子宮がんを発病する。
一九一九年	大正八年	三二歳	「文章倶楽部」に「百人一首中の最も好める歌」「島流し」を書く。
一九一七年	大正六年	三〇歳	「文章倶楽部」に「優しい母として―平塚らいてう氏」「女流の見たる文士、芸術家の印象」「花園」を書く。「婦人雑誌」に「幸福」「緑陰」を書く。「ピアトリス」に「越後屋の娘」を書く。「世界新聞」に「咲く花」の連載を始める。
一九一六年	大正五年	二九歳	「文学に就いて」「恋の詩人、ヨネ・ノグチ」を書く。「ピアトリス」に「少女と自然」「秋になつて」を書く。
一九一五年	大正四年	二八歳	「青鞥」に「星の空」を書く。「婦人雑誌」に「夫婦の愛情に就いて―愛の争闘を讀みて」「新らしき家庭の理想的女中」を書く。「新理想主義」に「鐘が鳴る」を書く。「新潮」に「私たちの作家を志した動機及び文壇に立たんとする抱負」「私と文学」を書く。「処女」に「新らしい少年少女文学に就いて」「恋の詩人、ヨネ・ノグチ」を書く。「ピアトリス」に「少女と自然」「秋になつて」を書く。
一九一四年	大正三年	二七歳	失職した朝鳥にかわり東京日日新聞社に入社する。朝鳥と別居する。「青鞥」に「風吹く日」「別れての二、三日」「卜者の言葉」「読んだものの評と最近雑感」「青葉の頃、最近の感想」「五月の雨の日に・最近の感想」を書く。「東京日日新聞」に「変装の女」を書く。「処女」に「危険なる年齢（別れて住める良人へ）」「初夏と女」「愛（ダンヌンチオの『犠牲』を讀みて）」「椿姫」を書く。「反響」に「小川未明氏へ」を書く。
一九一三年	大正二年	二六歳	この年東京に戻る。朝鳥が近代劇協会の機関誌「近代」を創刊し、みどりも手伝う。婦人博覧会でイエーツの詩劇『幻の海』（朝鳥訳）の女王デクトラを演じる。「青鞥」に「『新らしい女』に就て」「芸術の春」を書く。「青鞥小説集・第一」に「執着」が載る。「鷺城新聞」に「呪い」を連載する。
一九一二年	大正元年	二五歳	「青鞥」に「懷疑」「氷囊」を載せる。
一九一二年	明治四五年	二四歳	「青鞥」に「人形の家」「執着」を書く。

（岩田ななつ『青鞥の女加藤みどり』青弓社 平成五年 による）

四、「漂浪の児」の画像

①「漂浪の児」梗概《団樂第十二号》より》



②「漂浪の児」（一三五頁）《団樂第十二号》より》



③「漂浪の児」(二三七頁)《「団欒」第十二号より》



④「漂浪の児」(八〇ページ)《「団欒」第二卷第二号より》



〔参考文献〕

- ・岩田ななつ『青鞥の女加藤みどり』青弓社 平成五年
- ・らいてう研究会『「青鞥」人物事典二一〇人の群像』大修館書店 平成一三年

石丸梧平主宰の家庭雑誌「団欒」に関する調査⑥

宮 崎 尚 子

Study on Gohei Ishimaru's Family Magazine *Danran*-Part 6

Naoko Miyazaki

要旨

現物が確認できなかった大正初期の雑誌「団欒」を十八冊発見したとして、それらの目次を「石丸梧平主宰の家庭雑誌『団欒』に関する調査①」「石丸梧平主宰の家庭雑誌『団欒』に関する調査②」「石丸梧平主宰の家庭雑誌『団欒』に関する調査④」において紹介した。今回は、その『団欒』の中でも、雑誌『青鞥』の作家でもある加藤みどりについて紹介する。

Abstract

The table of contents for 18 installments of Gohei Ishimaru's family magazine *Danran* were introduced previously in parts 1, 2 and 4 of this series of papers. This paper introduces Midori Kato, who is the author of the magazine "Seitou".

キーワード

石丸梧平, 大正時代, 青鞥, 加藤みどり, 加藤朝鳥